

立田慶裕著「キー・コンピテンシーの実践、学び続ける教師のために、Key Competencies for Learning Teachers」明石書店 2014年3月28日刊を読む

I 教師の人間力とは

1. 教師の資質向上と人間力

(1) わが国の教育の在り方…「生きる力」の育成を基本とする。子どもたちの生きる力を育成することが教師にも期待される

(2) 教員に求められる資質能力

① いつの時代にも求められる資質能力

㊦ 教育者としての使命観

㊧ 人間の成長・発達についての深い理解

㊨ 幼児・児童・生徒に対する教育的愛情

㊩ 教科等に関する専門的知識

㊪ 広く豊かな教養

② 今後、特に求められる資質能力

㊦ 地球的視野に立って行動するための資質能力

㊧ 変化の時代を生きる社会人に求められる資質能力

㊨ 教師の職務から必然的に求められる資質能力

(3) 教師としての実践的能力

① 教師の仕事に対する強い情熱

② 教育の専門家としての確かな力量

③ 総合的な「人間力」

(4) 「総合的な人間力」とは

① 社会の変化や要請に対応するために必要な力

② 自立した一人の人間として力強く生きていく力

③ 単なる知識や技能だけではなく、技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で、複雑な課題に対応できる力

④ 主要能力、キー・コンピテンシー

2. 社会人に求められる人間力

(1) 「職業的発達諸能力」 <文部科学省>

- ①人間関係形成能力
- ②情報活用能力
- ③授業設計能力
- ④意思決定能力

(2) 「社会人基礎力」 <経済産業省>

- ①アクション
- ②シンキング
- ③チームワーク

(3) 「人間力」 <厚生労働省>

- ①コミュニケーション能力
- ②職業人意識
- ③ビジネスマナー
- ④資格取得

(4) 学士力

「各専攻分野を通じて培う学士力—学士課程共通の学習成果に関する参考指針—」

<文部科学省>

①知識・理解

他文化・異文化と、人類の文化や社会と自然に関する知識の理解

②汎用的技能

①コミュニケーションスキル

②数量的スキル

③情報リテラシー

④論理的思考力

⑤問題解決力

③態度・志向性

①自己管理力

②チームワーク、リーダーシップ

③倫理観

④市民としての社会的責任

⑤生涯学習力

④総合的な学習経験と創造的思考力

①獲得した知識・技能・態度等の総合的活用

②新たな課題への適用と課題解決能力

3. 世界の教育目標の標準化

(1) 「生涯学習のためのキー・コンピテンシー：ヨーロッパ標準枠組み」 < EC >

<各国の標準モデルとなるようなコンピテンシーとは>

- ①第一言語でのコミュニケーション
- ②外国語でのコミュニケーション
- ③数学的コンピテンスと科学技術の基礎的コンピテンシー
- ④デジタル・コンピテンス
- ⑤学習法の学習
- ⑥社会的・市民的コンピテンシー
- ⑦進取の精神と起業家精神
- ⑧文化的気付きと表現

(2) AHELO (OECD の大学版 PISA、高等教育における学習成果の評価調査)

- ①汎用的技能 (Generic-skills strand)
- ②専攻能力 (Discipline strand)
- ③付加価値能力 (Value-added measurement strand)
- ④状況対応能力 (Contextual strand)

(3) PIAAC (国際成人力調査 2013)

- ①リテラシーやニューメラシーといった言語、記号、テキストを相互作用的に用いる能力
- ②科学的な思考という知識や情報を相互作用的に用いる能力
- ③ ICT といった技能を相互作用的に用いる能力

II 知識基盤社会の教育と学習

1. 知識基盤社会の到来

(1) アリストテレスの知の区分

- ①エピステーメ (episteme、普遍的な理論化された知識としてのノウハウ)
- ②テクネー (techne、技術的で具体的、実践に関連する知識としてのノウハウ)
- ③フロネーシス (phronesis、規範的で経験に基づき、常識に関わる実践的な知恵)

(2) OECD の 4 つのカテゴリー (2000 年)

- ① Know what : 何を知っているかという事実に関する知識
- ② Know why : なぜかという原理や法則に関する知識
- ③ Know how : どうすればよいかという技術としての知識
- ④ Know who : 誰を知っているかに関する知識

(3) 日本の産業別人口構成の変化

- ① 1950 年代 第 1 次産業人口 49 % 第 3 次人口 30 %

② 21C 初 第1次産業人口 5% 第3次人口 70%

③第3次人口とはサービス産業従事者

21Cは、知識集約型のサービス産業従事者が増大→知識基盤社会への移行

(4) ドラッカー

①①知識労働は、生産的な労働の常として自らに対する需要を自ら生み出す。

②②その需要はとめどがない。

③③知識経済化により技能がなくなることはない。

②②逆に知識は技能の基盤となる。

③③高度の技術を身に着けるには、知識が必要となる。

④④しかも、技能を伴わない知識は生産的たりえない。

⑤⑤知識は技能の基盤として使うとき、初めて生産的となる。

③③知識労働者は、知識と技能を別のものとして学ぶのではなく、それを統合化した存在として位置づける。

(5) 「学習の学習」(Learning to Learn)

①①いかに学ぶかを学ぶ

②②知識を基盤とすることによって、学んだことを捨て、新しいことを学ぶ

(6) 知識基盤社会の労働で求められる能力

①①知識・技能・道具を使いこなすテクノロジスト

②②知識を技能や道具と結び付け、いろいろな目的に応じて知識を活用する能力

2. 知識基盤会社の特質

<ナレッジ・マネジメント>

「個人から集団や社会のレベルまで、どのような形で新しい知識を創造し、普及し、活用していくか。」

(1) 知の共有化

①①2つの「知識」

②②「暗黙知」(明確に見えない知識)

・目に見えない形で隠された私物化した知

③③「形式知」(文書や書類のように誰が見ても理解できるような形になった知識)

・目に見える形で残され共有化した知

②②個人が持つ「暗黙知」を集団で共有できる「形式知」に！

活用するナレッジ・マネジメントが重要。

③③専門家の暗黙知を抽出し、形式知として誰もが共有できる作業を行い、新たな知の創造を！

* ベストプラクティス、グッドプラクティス(人や地域の優れた実践)から学び「知識の移転」を。

(2) 「知識の移転」

① 「学び方を学ぶ」 こと

② 新たな学び方を学び、作り出した知識を伝えていくために、高度な移転可能な知識と技能を身に着けること。

③ 個人から集団組織、更には組織間での知識の共有化と知識の移転の取り組みが課題。

(3) 学習する組織—最強の組織になるために—

① 知識の共有と移転を行うため

② 多くの人が学習者となり、進んで学習に取り組み、多様な学習成果を目指し

③ 革新的、発展的な思考の枠組みと共通の目標を持ち、協働して学ぶ方法を学び続ける組織

3. 複雑化する社会

(1) 政治の世界

① 自律的で社会への参加意欲を備えた世代の形成

② 民主主義的な教育を経験した世代は、政治や社会を変える力に

(2) 経済の世界

① 第1次産業から第2次産業へ、第2次産業から第3次産業中心の時代への進行

② 更には高度な知識労働者を必要とする社会へ移行

③ 高度な知識とスキル・意欲を備えた労働者が生み出されるかによって、経済自体も変化

(3) テクノロジーの急激な変化

① 教育がどのような人材を育てるかで、テクノロジーの内容や速度が異なっていく

② ロボットや AI、IoT、5G など、人手にとって代わるテクノロジーの進行は、労働の世界から人間の職を奪っていく

③ より高度なスキルや知識を身に着けた人材によって新たな職業が開発されないと失業率がもっと高くなる

(4) 自然と環境の変化

① 地球温暖化の進む中、人々が環境を守るための優れた自覚を求められます。

② 「持続可能な社会の形成のための教育」つまり、ESD (education for sustainable development) が教育現場に浸透しています。

③ 地震や台風、津波や感染症などの「低頻度大災害」への備えのための防災教育をどれだけ充実するかで、地域の減災の可能性が高まっていく。

(5) 人口問題

① 高齢化が進行…学校卒業後、退職後の長い人生の中で学び続ける人々が増大、生涯学習の需要増大

② 少子高齢化が進行…生産年齢人口が減少
労働生産性を効率化する必要性

③高齢者が働き続けられる限り働き、次の世代を育てる社会づくり

(6) 家族問題

①大家族→核家族→ひとり親世帯の増加

②家族という集団の存続が困難に

③学校が従来協力の対象としてきた家族の教育が低下

④学校自体が家庭で行われてきた教育内容を負担する必要性が生まれている

(7) グローバリゼーション

①労働市場のグローバリゼーション

②世界的な市場の競争は継続的なイノベーションを要請

③教育もグローバリゼーション

④他国への留学で自分に適した教育機関の選択

⑤各国が自国へ優れた留学生を招聘

⑥他国の人材の確保

④「複雑な世界の中で生きる力」

④多様な文化や言語を学び、高度な知識とスキルを身に着けることで、

⑤国際社会で生きる力だけではなく、新たな技術を開発し、

⑥各国が協力し合って問題を解決する力が、すべての人にとって重要になってきた。

(8) ヨーロッパの総合、世界労働市場の発展の中、

①国際間の貧困格差の進行、不平等の問題

②環境問題

③医療の問題

など「課題を解決する力」が求められる。

(9) そのためには

①単に個人が世界競争の中で生き残るとい個人利益のためだけではなく、

②各人の優れた潜在能力を育てることで社会全体が利益を得るという視点が必要。

(10) 「ユニバーサルアクセスの環境づくり」

「ユニバーサルなデザインに基づく学習環境形成」が教育の重要な問題となる

①膨大な情報量の中から、

②一人の学習者が自分の潜在能力を伸ばし、

③社会問題の解決に必要な知識と情報を

④どれだけたやすく、速くアクセスできるか

⑤そしていっそう高いレベルの教育機会が得られるか

(11) こうした課題に対応するために

①「新たな知識を創造・普及・活用する方法」が各地で採用

② OECD もまた、欧米 12 か国の教育や行政の関係者を集めて「教育についての知の共有化」

をはかり、生まれたのが、「キー・コンピテンシー」。

- ③教師の総合的人間力(教師の力量)を高める方法について、「自己啓発力」「人間関係力」「道具活用力」の3つの「コンピテンシー」を中心に考えたい。

P22 ~ 33